

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月21日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H02926

研究課題名(和文) 教師の授業マネジメントが授業運営および子どもの学習行動に与える影響の解明

研究課題名(英文) Elucidating the influence of teacher's class behavior on class management and children's learning behavior

研究代表者

岸 俊行 (KISHI, Toshiyuki)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(教員養成)・准教授

研究者番号：10454084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、小学校・中学校で行われている一斉授業に焦点を当て、授業記録をもとに教師の授業マネジメントの特徴と子どもの学習態度との検討を行った。その結果、教師の授業内での子どもへの対応が子どもの授業態度に影響を与え、さらに学級の荒れに繋がっていることが示唆された。さらに小学校と中学校の教師の授業マネジメントを比較した結果、子どもとの関わりにおいて小学校の教師と中学校の教師では違いがあることが明らかとなったが、子ども自身の学習態度においては大きな差は見られなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の大きな意義は下記の2点にある。1つには、荒れている学級と荒れていない学級における教師の授業マネジメントを比較した点である。荒れている学級を対象とした研究は対象学級の選定から難しく、事例研究にとどまることが大部分であった。本研究では荒れている学級を選定し通常学級と比較することを通してその特徴を明らかにしたところに学術的意義がある。2つに小学校と中学校の教師比較を行ったところに大きな特徴がある。義務教育学校が創設されるようになる中で、小中学校の教師の教授方略を検討し、その特徴を明らかにしたところに本研究の社会的意義が認められる。

研究成果の概要(英文)：This study examined the characteristics of teacher's class management and children's learning attitude for mass teaching in elementary and junior high school. As a result, the following became clear. It was suggested that the teacher's response to the children in the class influenced the attitude of the children in the class, which further led to atmosphere that class is rough. Next, as a result of comparing the class management of the elementary school and junior high school teachers, it became clear that there is a difference between the elementary school teachers and the junior high school teachers in relation to children. On the other hand, there was no significant difference in children's attitudes to learning.

研究分野：教育心理学, 教育工学

キーワード：授業研究 教授行動 授業マネジメント 一斉授業 教師の暗黙知

1. 研究開始当初の背景

近年、初等・中等教育の現場では子どもを取り巻く環境の変化に伴う種々の問題が顕在化している。小1プロブレムや中1ギャップと呼ばれるような新しい環境に上手に適応できない子どもの増大や、依然として学級崩壊や不登校といった学校生活に順応できていない子ども達の事例が多く報告されている。また、2009年度には「特別支援教育」が改正学校教育法の中に位置づけられ、全ての学校において、障害のある児童生徒の支援を充実していく事が求められるようになった。実際、2012年に行われた全国調査では、発達障害の可能性のある子どもは、通常学級に約6.5%在籍していることが明らかとなっており、この数値は30人学級に換算すると約2人程度ということになる。さらには、学校を取り巻く環境も大きく変化している。少子高齢化が進み地方での小規模校の増大による統廃合も大きな問題になっている。このような学校現場を取り巻く環境の変化に伴い、小中一貫校の増設の動きも活発化している。この動きは、小中一貫免許制度の導入等、免許制度改革まで視野に入れた教員養成改革の流れにもつながっている。このような教育現場の現状の中で、近年は授業の形態も多様化している。知識基盤社会を背景としたグループワークの導入や調べ学習等の座学のみではない授業の展開、学力低下や多様な特徴を有する子どもたちに対応するためのTTによる授業の実施や学力別クラス編成、さらにはICTを用いた授業の実践等、様々な授業が展開されるようになっており、これまで以上に教師の授業方略が重要になってきている。

これまで教師の授業方略は教育研究の中心であり、その中心的関心は「どのように教えるのか」「どのように子どもと関わるのか」に主眼が置かれていた。しかし、先述したように、学校を取り巻く状況の変化や問題の顕在化、授業形態が多様化している現在では、教師の「教え方」のみではなく、「どのようにして授業を進めているのか」「なぜ、授業が成り立たなくなってしまうのか」といった教師の授業運営(マネジメント)に焦点化していくことが重要になってくる。授業は教師のみで成り立っているものではない。教師と子どもとの相互交渉の結果として立ち現われてくるものである。先述したように、教師の意識していない行動が授業マネジメントに影響を与えるのであれば、それは当然、子どもの学習行動にも影響を及ぼし、さらにその相互交渉の結果、授業雰囲気にも影響を与えていると考えられる。このような教師の授業内での授業マネジメント行動は従来、教師の暗黙知・経験知で片づけられることが多く、あまり研究の中心として扱われてはこなかった。しかし、先述したように、現在の教育現場の顕在化している問題を考える場合、教師のこのような暗黙知・経験知にまで踏み込んだ教育研究をしていく必要性がある。

本研究によってもたらされる知見は、教師の授業力低下等、教育現場で顕在化している問題の解決に資するのみならず、広く教員養成課程の学生たちにも、教師の暗黙知・経験知の一端を伝えることが可能になるという点で、非常に重要な意義を持つと考えられる。

また本研究の特色ある点として、小学校教師と中学校教師を対象に比較を行っている点が挙げられる。小中一貫教育が推進されていく中で、小学校、中学校それぞれの教師が授業中にどのような授業マネジメントを行っているのかを比較検討することは、今後の小中一貫免許等を考えるうえでの重要な資料の提示につながると期待される。これまでの教師教育研究では、小学校、中学校それぞれ個別に検討され、小学校と中学校の教師比較が行われることはほとんどなかった。しかし、授業運営という視点で教師の授業方略を考える際には、小学校と中学校の教師比較を行うことで、子どもの発達に応じた教師の授業運営方略の解明につながるという点で意義がある。

2. 研究の目的

本研究では、従来、教師の暗黙知で片づけられることの多かった授業内での教師の授業マネジメントに焦点化し、教師の授業マネジメントを類型化することでその特徴を探り、それが学習者の学習行動にどのような影響を与え、また、授業マネジメントの違いが授業の認知(雰囲気)にどう影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。教師の授業マネジメント行動は非常に多岐にわたるが、本研究では分析視点を明確にするために、教師の【発話】および【机間巡視を含む身体動作】、【視線の動き】の3つに着目し、身体動作データベースの作成を行う。また、学習者の学習行動として、授業中の能動的行動(自発発言、挙手行動)と受動的行動(応答発言、ノートテキング等)とに分けて分析を行う。その際に、教員養成改革の動向も鑑み、小学校教師と中学校教師を対象に、授業マネジメントの差異についての検討も行う。

3. 研究の方法

本研究では、教師の授業マネジメント方略について実際の授業実践の中からデータを収集し、その特徴を明らかにすること及び学習者の学習行動との関連を検討することが目的である。目的遂行のために、本研究では、3都県の小、中学校を分析対象校とし、各学校においてデータ取得を了承いただいた学年・クラスを対象とした(本研究期間を通して対象とした学校は、小学校:12校、中学校:8校)。本研究の中心的関心は教師の授業マネジメントおよびそれに関連し教師と子どものコミュニケーションについてその特徴を明らかにすることであり、教師の授業方略を明らかにするわけではないため、データ収集のための対象授業は偏りなく教科(国

語・数学・英語・社会・理科)と領域(道徳・総合的な学習の時間)を対象とした。収集された授業実践データはプロトコル化され、発話コード、教師子どもの身体動作コードを付加した授業記録データベースを構築した。

構築された授業記録データベースをもとに、以下の分析を行った。1.教師の授業マネジメントと学習者の学習行動との関連分析,2.教師の授業マネジメントと学級(授業)の荒れとの関連分析,3.授業マネジメント方略に関する小学校教師と中学校教師の比較。なお分析では、授業記録データベースに基づいた発話・身体動作の量的分析と特徴的・代表的な教師と子どものやり取りを示す事例を抽出した事例分析,授業認知を明らかにするための質問紙分析の3つを行った。

4.研究成果

ここでは本研究課題によって明らかとなった知見について分析ごとに述べていく。

1.教師の授業マネジメントと学習者の学習行動との関連分析

(1)授業内における児童の発話に関する分析(小学校)

授業内における児童発話の発達的特徴を検討するために、まず初めに授業内で発言した児童発話の時間と回数の分析を行った。授業内での教師発話と児童発話の合計である授業内発話時間と児童発話だけを分析対象とした児童発話時間をそれぞれ従属変数とし、低学年、中学年、高学年の3群を独立変数とした分散分析を行った。分析の結果、授業内発話時間、児童発話時間それぞれにおいて、5%水準で有意な差はみられなかった。このことより、授業中における〔教師-児童〕の言語コミュニケーションに占める時間に学年差がないことが明らかとなった。また、児童が授業中に発言する時間に関しても学年差はみられないという結果であった。このことより、授業内での児童発話に関して発話時間の総数には発達的特徴はみられないと考えられる。次に授業内での教師児童コミュニケーションの特徴として、授業内発話時間の中に占める児童発話時間の割合を算出し学年(低・中・高学年)での比較を行った。その結果、発話時間の割合には学年による有意な差が見出された。具体的には中学年と低学年・高学年の間で有意に中学年が他学年より高いことが分かった(Figure1)。次に、授業内での児童発話の回数について検討を行った。検討の結果、発話回数においても3つの学年群において有意な差が見出された。具体的には、中学年と高学年において、有意に中学年の方が児童の発言回数が多いことが分かった(Figure2)。以上の結果より、教師と子どもの授業全体における発話の特徴として、教師においては受け持つ学年による大きな特徴は見出されないが、児童においては発達に応じた発話の違いが大きくみられること、また、入学当初の子どもが比較的多く発話し、中学年になると発話量が増え、高学年になると一気に下がると言う事が見出され、この結果は中学年時期にみられる子どものギャングエイジの理論とも重なる。また岸・野嶋(2006)で明らかのように、子どもの授業における態度はある程度発達的な特徴を有しているのに対して、教師は自らの授業方略に基づいた子供との接し方を行っているということが本研究より示唆される。

次により詳しく授業内での子どもの発話の検討を行った。授業内の子どもの発話スタイルを児童の発話の契機から教師の求めに応じる形での発話としての“応答”と、自分から発話する“発言”の二つに分け検討を行った。検討の結果、子どもの発話スタイル(応答,発言)と学年においては有意な関連が見られることが明らかとなり、応答スタイルは高学年に多く低学年は少ない傾向が、発言スタイルは低学年が多く、高学年が少ない傾向が示唆された(Table1)。この結果より、子どもは学校の授業を経験することで授業内での発話スタイルを身に着け、徐々に教室のディスコースを内面化していることが示唆される。

(2)英語と国語の授業のイメージの因子分析(中学校)

教師との授業内での関わりは子どもの授業に対するイメージに影響を及ぼしていることが推察される。そこで中学校に入って子どもがまずく要因である英語の授業へのイメージ形成の検討を行った。その際に英語の授業イメージの特徴を明らかにするため、国語の授業イメージとの比較を行った。英語と国語の授業のイメージの構成因子を明らかにするために、英語と国語の授業に関してそれぞれ25項目の形容詞対への評価に対して因子分析を行った結果、3因子解を採択した。次に因子の解釈を行った結果、第1因子を「活動的授業」因子、第2因子を「構造的授業」因子、第3因子を「伝統的授業」因子と命名した。なお、信頼性を検討するために、クロンバックの係数を算出したところ、第1因子から順に $=.881$, $=.862$, $=.788$

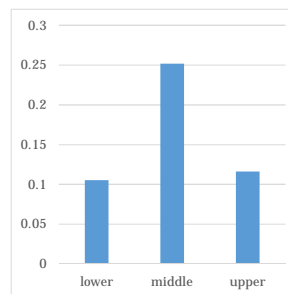


Figure1 Comparative grade comparison of proportion

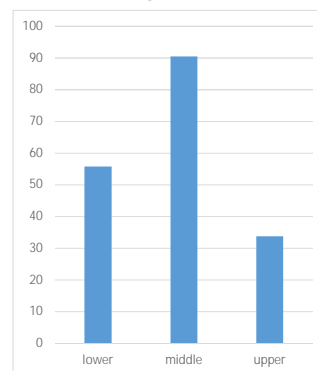


Figure2 Comparative grade comparison of number of children utterances

Table1 Relation between utterance style and grade

	lower	middle	upper
Response	212	386	211
Remark	298	337	44

⋯: Significantly more at the 5% level
 ⋯: Significantly less at 5% level

という値が得られた。これらの値は高い値であり、十分な信頼性が確認された。以上の因子分析の結果より、英語と国語の授業のイメージは「活動的授業」、「構造的授業」、「伝統的授業」の3因子構成であることが確認された。

次に、個人の中で「英語授業」と「国語授業」に持っているイメージに違いがあるかの検討を行った。検討の結果、「活動的授業」「伝統的授業」は英語授業のほうが有意に高く、「構造的授業」は国語授業のほうが有意に高かった。この結果より、生徒は英語授業に関していくつかの項目では好意的な評価をしていることが示唆された。これらの結果は、教師の授業内での生徒との関わりが、生徒の授業認知に大きな影響を及ぼしているとして示唆される。

2. 教師の授業マネジメントと学級（授業）の荒れとの関連分析（小学校）

教師の授業マネジメントが子どもたちに及ぼす影響を検討するために、まず初めに荒れている学級における教師の授業マネジメントの検討を行った（予備調査）。管理職が荒れている学級と認知している学級と通常学級の二つの学級群を対象に、それぞれの学級ごとの教師の授業マネジメントの特徴を検討した。検討における指標として以下の2つを用いた。1. 中断時間（授業と関係の無い話題・行動に費やした秒数）、2. 子どもの立ち歩きのべ回数。分析の結果、通常学級における中断時間の平均は19.15秒であるのに対し、荒れている学級の中断時間の平均は95.65秒であった。また子どもの立ち歩きのべ人数の平均は通常学級では0.98人（/回）であるのに対して、荒れている学級では17人（/回）であった。このことから、本研究で荒れている学級は通常学級に比べ、授業運営に苦慮しているということが伺える。

次にそれぞれの指標に対してカテゴリー分析及び事例研究を行った（本調査）。児童の発言内容に対する教師の態度を検討した結果、児童の【応答】に対して「通常学級」の教師は【受け入れ】をすることが多いのに対し、荒れている学級の教師は【無視】をすることが多かった。また児童が授業に直接関係のない発言をした際、「通常学級」の教師は【受け入れ】【名指しでの注意】が多いのに対し、荒れている学級の教師は【無視】が多かった。以上の結果より、児童の授業中のどのような発言に対しても荒れている学級の教師は【無視】をするという特徴があることが示唆された（Table2）。教師の授業内での位置に関しては、通常学級の教師も荒れている学級の教師にも関連が見られなかった。またいくつかの事例を検討した結果、児童が授業中に立ち歩いた際の教師の介入が通常学級と荒れている学級の教師の間で異なることが明らかとなった。どちらの学級の教師も注意を行うが、通常学級の教師は注意に加えて次の課題を提示するなど児童の授業への参加を促す働きかけを行っていたのに対し、荒れている学級の教師は、注意のみで終わっている場面が多く見られた。以上の結果より、通常学級と荒れている学級の教師の授業内での児童への対応には差が見られることが明らかであり、それが学級の荒れに繋がっていることも示唆された。

Table2 Characteristic of correspondence of teacher

	Difficult Class	Normal Class
attention by name	15	35
indirect attention	73	31
explicitly denial	13	2
implicitly denial	35	4
paraphrase	58	39
positive reception	229	488
incorporation	5	13
neglect	254	51

⋯: Significantly more at the 5% level
 ⋯: Significantly less at 5% level

3. 授業マネジメント方略に関する小学校教師と中学校教師の比較

小学校と中学校の授業における教師の授業マネジメントの違いの検討を行うために、小中学校の一斉授業内での教師の発話を、教師発話カテゴリーをもとに小学校・中学校教師の比較を行った。教師発話は大きく、授業発話と相互交渉企図の発話とに分類を行った。まず学校種（小学校・中学校）ごとに教師が授業内で用いる発話スタイル（教師発話カテゴリー）の違いを検討した結果、有意に学校種ごとに教師が用いる発話カテゴリーに違いがあることが明らかになった（Table3）。小学校教師は相互交渉企図の発話が中学校教師より多く、中学校教師は授業発話が小学校教師より多いという結果であった。このことより、中学校の教師よりも小学校の教師の方が授業中に子どもとの関わりを中心に授業を進めていることがうかがえる。

次に教師の授業発話の中で、小中学校の教師間での違いを検討した。授業発話を大きく授業内容関連、授業内容無関連、授業内容派生の三つのカテゴリーに分類し、学校種と授業発話カテゴリーとにおいて関連があるかの検討を行った。検討の結果、有意に学校種ごとに教師が用いる授業発話カテゴリーがあることが明らかになった（Table4）。小学校の教師内発話では、中学校の教師内発話と比較して、【授業内容関連】が多く、【授業内容無関連】が少ないという特徴があり、

Table3 Characteristics of in-class utterances of elementary and junior high school teachers

	utterance of class	utterance of interaction	total
elementary school	484	2067	2551
	18.97%	81.03%	100.00%
	44.08%	70.62%	63.38%
Junior high school	614	860	1474
	41.66%	58.34%	100.00%
	55.92%	29.38%	36.62%
total	1098	2927	4025
	27.28%	72.72%	
	100.00%	100.00%	

$\chi^2(1) = 242.59, p < .01$

- * The upper number (1) is the teacher's utterance real number
- * The middle number (2) is the ratio of utterance category to school types
- * The lower number (3) is the ratio of school types to the utterance category
- * Significantly more at the 5% level
- * Significantly less at 5% level

中学校の教師内発話では、小学校の教師内発話と比較して、【授業内容関連】が少なく、【授業内容無関連】が多いという特徴が明らかになった。小学校・中学校共に教師内発話の【授業内容派生】には関連が見られなかった。このことから、小学校教師は説明する時には雑談などほとんど行わず、授業の内容を意識させている。中学校教師は授業中は説明が多いので、生徒の集中力に緩急をつけるように雑談を交えて説明していることが推察できた。

従来、授業研究は多く行われてきているが、殆どの研究は小学校は小学校、中学校は中学校のパラダイムに閉じられた研究が多く、小中学校の教師比較を行う研究は殆どみられていない。

しかし研究の背景においても述べたように、小中一貫校や義務教育学校が設立されている中で小中学校の教師比較を行うことは非常に重要な知見をもたらすものである。とくに本研究課題によって明らかになったように、教師は小学校・中学校で授業内発話を変えていることがうかがえる。今後、義務教育学校等において本研究の知見に基づいた更なる研究が行われることが求められるといえる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 21 件)

澤邊潤 (2019) 教職協働による地域連携型教育プログラム開発の試行的取組 新潟県小千谷市へのフィールドワークを事例として, 新潟大学高等教育研究 6, 39-44 査読無

澤邊潤, 林なおみ, 坂上剛, 赤坂千秋 (2019) 「総合的な学習の時間」と「国語科」の横断的な学習における大学生の関与とその効果, 日本教育工学会研究報告集 19(1), 519-524. 査読無

Toshiyuki KISHI (2018) Evaluation of a Collaborative Project using ICT in Small-Scale Schools to Achieve a Wide Variety of Relationships. Journal of Education and Human Development, 7(1), 72-81 査読有

Toshiyuki KISHI (2018) Japanese English Learners' Recognition of English Images, 2018 IEEE International Conference on Teaching, Assessment, and Learning for Engineering (TALE) 査読有

岸俊行 (2018) 授業における教師の雑談が持つ役割の探索的検討, 福井大学教育・人文社会系部門紀要 第 2 巻, 179-194 査読無

後藤康志, 伊藤充, 澤邊潤 (2018) 「チームとしての学校」を担う教員を育む学校, 行政, 大学の連携による学校フィールドワークの開発, 新潟大学高等教育研究 5, 23-28 査読無

大久保智生 (2018) 現代の子どもたちの「コミュニケーション能力低下」言説を検証する 体育科教育, 66(11), 12-15.

岡田涼, 時岡晴美, 大久保智生 (2016) 学校支援ボランティアとのかかわりが学校所属感を介して学習に対する動機づけに及ぼす影響: 学校支援地域本部事業の成果として 学校心理学研究 16(1), 27-37

大久保智生 (2016) 穏やかな達成を目指す目標の変化 2 × 2 達成目標モデルの日本人への適応 (児童発達分科会) 心理科学 37(1), 73-74 査読無

岸俊行 (2015) 一斉授業における教師の教授行動の特徴とそれが授業の雰囲気と及ぼす影響の検討, 福井大学教育地域科学部紀要, 第 5 巻, 197-211 査読無

大久保智生 (2015) 教育社会心理学に関する研究の動向と展望 教育心理学年報 54(0), 45-56, 査読無

大久保智生 (2015) 中 1 ギャップについての発達論的考察-中学校への進学を通じた子どもの成長-(児童発達分科会, 分科会報告, 心理科学研究会 2013 年秋期研究集会概要) 心理科学 36(1), 74

[学会発表](計 19 件)

岸俊行, 辻岡麻美 (2018) 教師の教授行動と授業が荒れる要因の関連, 日本教育心理学会第 58 回総会

澤邊潤, 古村健太郎 (2018) 地域・自治体・大学の協働による授業科目開発のプロセス (2) 学外学修プログラムの実践と評価 日本教育心理学会第 60 回総会発表論文集, 153. ポスター発表

澤邊潤, 後藤康志, 伊藤充, 古村健太郎, 山田浩之 (2018) 大学・教育委員会・学校の連携による教育プログラム開発の試み プログラム開発に関するビジョンの共有と教育ニーズ

Table4 Subcategory of class utterances of elementary and junior high school teachers

		class content	disrelation of class	suggestion of class	total
elementary school	1	400	21	63	484
	2	82.64%	4.34%	13.02%	100.00%
	3	45.61%	28.00%	43.15%	44.08%
Junior high school	1	477	54	83	614
	2	77.69%	8.79%	13.52%	100.00%
	3	54.39%	72.00%	56.85%	55.92%
total		877	75	146	1098
		79.87%	6.83%	13.30%	
		100.00%	100.00%	100.00%	

$\chi^2(1) = 8.75, p < .05$

* The upper number (1) is the teacher's utterance real number

* The middle number (2) is the ratio of subcategory of class utterance to school types

* The lower number (3) is the ratio of school types to the subcategory of class utterance

* Significantly more at the 5% level

* Significantly less at 5% level

把握のプロセス , 日本教育工学会第 32 回全国大会講演論文集, 417-418 .
岸俊行 (2017) ネット会議システムを用いた学校連携プロジェクトにおける効果と課題の検討, 日本教育心理学会第 58 回総会, 名古屋大学
岸俊行 (2016) 教師と子どもの相互交渉から捉える “ 授業 ” のかたち, 日本発達心理学会第 27 回大会, ラウンドテーブル「授業におけるコミュニケーションの背景と意味を考える」, 北海道大学
Toshiyuki Kishi (2016) Study on cognition of friend of young moderns. 31st International Congress of Psychology, Yokohama
澤邊潤, 古村健太郎 (2016) 地域・自治体・大学の協働による授業科目開発のプロセス (1) 参加型アクションリサーチによる学習課題の分析 , 日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集, 422. ポスター発表

[図書] (計 9 件)

澤邊潤, 木村裕斗, 松井克浩 (編著) (2019) 長期学外学修のデザインと実践 学生をアクティブにする , 東信堂 .
大久保智生 (2019) 学級集団 杉本明子・西本絹子・布施光代 (編) 理論と実践をつなぐ教育心理学 みらい Pp.180-197.
澤邊潤 (2019) 村上香奈, 山崎浩一 (編著) よくわかる心理学実験実習, ミネルヴァ書房 . (担当箇所 : 「要求水準 (p108-113) 」 「ロールプレイ (p126-131) 」)
大久保智生・牧郁子 (編) (2019) 教師として考え続けるための教育心理学 : 多角的な視点から学校の現実を考える ナカニシヤ出版
岸俊行 (2017) ノートテイキングが学習に与える影響 (pp.22-37), 一斉授業の特徴を検討する (pp.60-79), 野嶋栄一郎編, 研究と実践をつなぐ教育研究 (株式会社 ERP)
澤邊潤 (2017) 児童の挙手行動を起点とした教室のダイナミクスから視る教師の関わり (第 2 章 p80-94), 北条小学校の教員育成機能を支えるファクター (第 5 章 p204-219), 野嶋栄一郎 (編著) 研究と実践をつなぐ教育研究, ERP
岸俊行 (2015) 一斉授業の特徴を探る 授業を観る, 測る, 考える (ナカニシヤ出版)

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名 : 井上 博行

ローマ字氏名 : (INOUE, hiroyuki)

所属研究機関名 : 福井大学

部局名 : 学術研究院教育・人文社会系部門 (総合グローバル)

職名 : 准教授

研究者番号 (8 桁) : 10303356

研究分担者氏名 : 大久保 智生

ローマ字氏名 : (OHKUBO, tomoo)

所属研究機関名 : 香川大学

部局名 : 教育学部

職名 : 准教授

研究者番号 (8 桁) : 30432777

研究分担者氏名 : 澤邊 潤

ローマ字氏名 : (SAWABE, jun)

所属研究機関名 : 新潟大学

部局名 : 人文社会科学系

職名 : 准教授

研究者番号 (8 桁) : 30613583

科研費による研究は, 研究者の自覚と責任において実施するものです . そのため, 研究の実施や研究成果の公表等については, 国の要請等に基づくものではなく, その研究成果に関する見解や責任は, 研究者個人に帰属されます .